

<実践報告>地方の「受験」「部活動」を軸とする「学校文化」に関する考察：「ナラティブアプローチによる附属学校卒業生の学びのヒストリー研究」から

著者	井上 正允
雑誌名	筑波教育学研究
号	11
ページ	41-53
発行年	2013-03-09
URL	http://doi.org/10.15068/00155346

実践報告

地方の「受験」「部活動」を軸とする 「学校文化」に関する考察

—— 「ナラティブアプローチによる附属学校
卒業生の学びのヒストリー研究」から ——

井上正允*

Notes on “School culture” around “Juken (Preparing for Entrance Examinations)” and
“Bukatsudo (Club Activities)” in Local Area-based on the report A Narrative Approach
Study on Learning Histories of the Graduates of University Attached Schools

Masachika Inoue

佐賀大学文化教育学部における教員養成（数学教育）や学部と県教委・附属学校の連携や改革の取り組みの中で、附属小学校・附属中学校を卒業し県立佐賀西高を経て大学に進学した大学2年生・1年生8名を対象に学部教員が聞き取り調査（2011年度）をおこない、附属小中学校・佐賀西高の協力を得て卒業生の「学びのヒストリー」研究をすすめた。小論では、この研究に関わったこと、7年間の大学生や院生とのつきあい、地域の学校との関わり等から見えてきた地方の中学・高校の「受験」「部活動」を軸とする「学校文化」に焦点をあてる。とくに、小学校から中学・高校と学年が上がるにつれて「教科の学び」と「生きること」が切り離されていく現実、「学ぶこと」「考えること」「議論すること」が希薄になっていく実態について考える。

1. はじめに

芦田恵之助が学力の「剥落」現象と表した病める学力について、教育史家の中内敏夫は「感性による反撥を引きずりながら、意識の表層では『学業成績』に一喜一憂してきたのが、近代の多くの親たちである」「日本の学力の病める姿を云々するばあいには、その水準の高低だけでなく、学力をめぐる意識の表層と深層のちぐはぐをも問題にすべきだろう」

*前佐賀大学文化教育学部

「感性の反撥をともないながらのしょいこみは、学力を、当の親や子どもたちになにか重荷のようにおもいこませがちだからである。これを自分のもちまへの能力の世界に、外部から入ってきた一時期の寄留者たらしめるからである」「人間とともにある能力になっていない、重荷や一時期の寄留物ならば、時期がくれば衣がえするようにすて去られるだろう。そのまえに、重荷を負うことを拒否して『おちこぼれ』ということにもなるだろう」と論じた。^①（中内1983）日本では、「手続き的知識の習得」が「概念的理解」よりも重視され、PISAの「数学的リテラシー」に代表される「活用力」「探求力」には相当の問題があることを、認知科学の藤村は指摘する。^②（藤村2008）

佐賀の公私立の進学校から、大学に進学した生徒が相当に苦勞しているとか挫折するケースが少なくないという話が聞こえてくる。1990年前後に、九州大学の転部率・転科率、中退率が高いことが報じられたことがあるが、原因はモーレツな詰め込みと生徒の意向や適性を考慮しない進学校の受験指導にあるとされた。主体的に「学ぶこと」や「考えること」「議論すること」がどのような営みであるのか、「生きること」と「教科の学び」を重ね合わせながら「自分を探る」という作業を中高生活で経験してきていないというのである。

小論では、20数年経った現在も、こうした問題が解決していないことを実証する。

佐賀大学の「学びのヒストリー」研究**（2011年度に日本教育大学協会研究助成を得た附属学校卒業生を対象としたナラティブ調査）に関わったことを契機に、筆者自身の42年間の教師生活の最後の7年間の「佐賀という地域・学校」「九州の学校文化」について考える。

横浜・東京で35年間の中高の教員生活を送った後に、佐賀大学で7年間教員をつとめたが、この間「東京の学校やその文化、システム」と「佐賀・九州の学校文化」をいやがおうでも見較べながら「中央の教育と地域の教育の違い」について感じることに、考えることがたくさんあった。学校活動の中で東京の普通の公立学校とは比べものにならないくらいの比重を持つ「部活動」、見聞きする限り東京とは相当の乖離がある「受験指導」を中心に、「学校文化・システムやカリキュラム」「学校生活」について考えてみたい。

「大学（高校）受験」「部活動」を軸に展開される学校カリキュラム・進路（受験）指導・部活動による生徒管理システムが、佐賀の「学校文化」を特徴づける

最大の問題であると考えているが、これは他にもいくつか書いてきたので詳しくはそちらを参照して欲しい。³⁾

今回の「学びのヒストリー」調査によって、筆者の42年間の教員生活を振り返ることができ、7年間の大学教員としての生活、大学生の学びの姿勢や語り、附属中学校長時代の教員、保護者との対話などを通して漠然と思い描いてきた仮説を、今回の「聴き取り」調査によって裏付けることを目的とする。

2. 地方の中高の「受験文化」と「部活動」—「生活指導（生徒管理術）」「人間形成術」

筆者は、九州大学に何人合格させたのかによって高校を格付けする九州の「受験文化」に疑問を持つ。前任校の筑波大駒場中高には、毎年1～2名だが北海道大学や東北大学に入学する学生がいた。医学部に進学した卒業生からは、北海道や東北各県から集まってくる学生が持つ「鼻持ちならぬ『選民』意識」について聞かされてきた。九州の進学校から送り込まれた九州大学の学生の意識も似たり寄ったりなのではないかと、今は考えることができる。医学部に限らず旧帝国大学の学生は、自他共に認める「選民エリート」なのである。

佐賀大学には、九大受験の失敗組もかなりの数入学してくる。文化教育学部（教員養成課程）では、佐賀県や福岡の筑後地方（久留米・八女・柳川・大牟田など）の出身者が全体の7割程度を占めるのだが、彼らとつきあい、対話を重ねながら、九州の中学・高校の教育には相当な課題や問題があると考えてきた。

中学校でいえば、異様な時間とエネルギーをとられる「部活動」。土曜日・日曜日の早朝には、公立中学校の校門からユニフォームにジャージをまとう中学生を乗せた何台もの自家用車が、県内はもちろん、県を超えて遠征試合に出かけていく。運転手は、生徒の父親・母親である。熱心な部活指導者になると1年の内、6～7日ぐらしか休日がないとか「子どもを縛り付けておけば、悪さはできない」という話も聞いた。これが、公立中学校の「生活指導（生徒管理術）」「人間形成術」なのである。こうした実態・事情は、附属中や公私立の高校でもほぼ同様である。

数学教員志望の大学生の中に、「中高の部活によっていまの私がある。数学をしっかり学んで『数学の面白さ・大切さを伝えたい』というよりは、部活動の指導者になって生徒の人間形成に関わりたい」と考えている学生が異様に多い。もち

ろん部活動で努力し、試合で勝負の厳しさと勝つことの難しさを知り、技術やチームワークを学ぶことで人として成長することはある。これを全面的に否定するわけではないのだが、筆者がこれまで考えてきた教師の主たる仕事は、やはり「授業づくり」と「学級づくり」にある。

中学・高校の細かな校則も気になる。「失敗をさせない」「間違いを起こさせない」予防的な「学校慣行や校則」が目につく。地域の学校の体育祭・運動会・文化祭・入学式・卒業式・フリー参観デー（学校公開日）が、なぜか同一日に実施される。他校生との無用な接触・トラブルを避けることがネライらしい。いたる所に「問題が起きないように」な未然防止策、無菌培養（囲い込み）システムが張り巡らされている。大学教員が併任する校長以外は県の人事交流制度によって人事のほとんどが決まる附属学校でも、これまで述べてきた「地域の学校文化・システム」が顕在なのである。

学校文化とは、学校を支える地域社会の風習・慣行・伝統・思考方法・価値観などの総称であり、システムとはそれらを支える仕組みである。こうした文化・システムが世代を通じて伝承されてきている。横浜・東京で教員生活を重ねてきた筆者にとって、「高校や大学の進学実績や部活動実績で学校が格付けされる」「伝達される知識やスキルを受容することが最優先され、授業を通して『自分の生き方』を考え、探るという営みが脇に追いやられている」「子どものはみ出しや逸脱・停滞を良しとしない、子どもが右肩上がりの成長を是とし、問題を起こさない学校が良である」とする学校文化やシステムに違和感を覚えた。

附属中学校長を併任していた時に30台半ばの教員から聞いた話だが、以前勤めてた公立中学校では、放課後、若い教員が職員室で翌日の教材準備をしようものなら、先輩教員から「早く、体育館・グラウンドに行かんかい」という檄が飛ぶのだそうだ。吹奏楽や合唱を指導する教員からは、地区大会で金賞を取っても「ダメ金じゃね」と保護者から文句が出るという。九州大会や全国大会の出場権につながる金賞と地区大会・県大会止まりとでは同じ金賞でも価値が違うのだそうだ。「校長がいた横浜・東京では違うのですか？」との質問もたくさん受けた。

九州は昼間の時間が長いから、夏であれば7時過ぎまで、冬でも6時過ぎまで部活動が行われる。ほとんどの教員が車通勤だから、夜9時～10時まで学校で会議をしたり、明日の授業準備をすることが普通なのである。こうした超過勤務を放置してきた校長会、県市町の教育委員会の責任は重いと考えるが、教員もこれ

が「佐賀では、あたりまえ」と考えているので、文句は言わない。労働基本権や民主主義を教える社会科教員までがこれだから、「何を教えているのだ」という小言の一つも言いたくなる。

県立高校の合格発表後に保護者同道の入学者説明会が開かれ「君たちは今日から大学受験生である」と檄をとばされ、膨大な課題（数学では、すぐに数学Ⅰの教科書を購入し2章までに目を通しながら課題をこなさなければならない）に取り組み入学式前に提出する。0時間目、7～8時間目、長期休暇中の補習、おびただしいテストの数、予備校や業者が作る全国模試の数日前には、過去問が授業時間に取り上げられ解説される。噂には聞いてはいたが、それを体験してきた卒業生の語りによってあらためてその実態が確認できた。

数年前に問題になった高校の「世界史未履修」問題もこうした学校教育の文化・システムが生み出した構造的産物であると筆者は考える。しかし、親たちもこうした学校文化の洗礼を受けているものだから、疑問に感じることはないどころかこれを当然のこととして求めるのである。県教育委員会も校長会・教頭会も、こうした「地域や保護者のニーズ」「進路保証（子どもの夢の実現）」論を振りかざし、正当性を主張する。これがやっかいなのである。

この7年間、「東京で塾や予備校が担っている役割を、地方では学校が負わなければならない」「部活動に熱心な教師は、総じて教科指導にも熱心である」「佐賀には佐賀のやり方がある」「東京モンが何を言うか」という言葉を何度となく頂いた。

3. ナラティブアプローチによる「学びのヒストリー」研究の方法と目的

これについて詳しくは、2012年3月に日本教育大学協会に提出した報告書に目を通して欲しい。⁴⁾ 附属小学校・中学校を卒業し、佐賀県立のトップ校である佐賀西（320名の学年生徒の4分の1以上を附属中出身者が占める。佐賀では自他共に認めるエリートコースである。）を卒業した大学2年生（一浪した大学1年生を含む）8名のナラティブ調査である。学部教員8名がそれぞれ担当するインフォーマント（語り手）へのインタビューを試み、「附属小中や佐賀西高で学んだことがら、大学で学ぶ現在どのように生きていて、自身が考えているこれからの生き方や仕事とどのようにつながるのか」等を聴き取り、トランスクリプト（対話録）をつくる。それをもとにそれぞれの切り口で、学部教員がインフォーマン

トの各校種での学びについて分析・評価し、論文に仕立てる。できあがった原稿を、附属幼稚園の副園長、附属小・附属中の研究主任、佐賀西高の校長先生が読みそのコメントを掲載した報告集である。

研究代表者である佐長健司は、研究の目的について次のように述べる。⁶⁾ 要約を紹介する。

目的は、(1) 異校種連携による学校教育の共同研究 (2) 学校教育を問い直すことである。附属中の呼びかけで始まった附小、西高との共同研究だが、教師たちは多忙を極めるなか、貴重な時間とエネルギーを注ぐ。各学校が置かれている社会的状況は異なり、学校文化の差異は小さくない。中学校の教師は中学校の教育を考えることに専念し、小学校や高校の教育については深く知ろうとしない。小学校や高校の教師についても同じ様である。(限られた時間の中で) 教育実践について議論しても、重要な論点を共有すること、議論を深めることも難しい。

これまでも、(附属の) 中1生や(西高の) 高1生を対象としたアンケート調査や附属中の入学試験の分析を実施してきたが、これらは教師の視点からの実証主義的な量的研究である。() は筆者。本研究の目的は、教師には見えない学習者の実態、学習者の事実、小学校・中学校・高校と継続した学びを校種ごとに分断して把握するのではなく、長期的な視野で学習者の視点からの学校教育について考察するために、学習者の語りによる「学びのストーリー」を記述し、解釈する質的研究なのである。

4. 二人の語りを読み解く

筆者は、東京の私立C大学で英語学・コミュニケーション論を学ぶBさんを担当した。彼女は佐賀市出身で、附属小中で9年間学んだ後に佐賀西高に進学する。幼稚園から公文(英語)やピアノ、スイミングに通い、小学校受験の1年間は、附小専門の受験塾のS社に通う。小学校3年生までは、3歳年上の兄と行きも帰りも一緒にバス通学。ピアノや英語の習い事は続けたが学習塾にはいかなかった。4年生からは、兄が私立中学に入学したのでひとりでのバス通学が始まる。私学受験も視野に入れたご両親の方針で、進学塾のE館に通い始める。私立中も受験し合格するが、Bさん本人の希望で附属中に入学。附属中では、生徒会の総務をやったり合唱コンクールで伴奏者をつとめたり、友人関係も良好であった。お稽古事では、水泳が書道に変わったが公文で英語、E館の受験勉強を中心とした

「学び」が続く。自宅が遠かったことや塾や習い事を優先させたいとの家庭の方針で、部活動には参加しなかった。小学校時代から附属の友達とはよく遊んだが、近所の子どもたちと遊んだことがない。附小時代は勉強はできる方だったと思うが、いわゆる「やんちゃな子どもっぽい（らしい）子」が少なかったように思うと語る。

勉強（Bさんにとってはイコール受験勉強）はE館がメインで、附中での昼休みや放課後の過ごし方は、同じように考えている友達と塾の宿題をしたり受験問題を解いたりというものであった。学校の勉強については、「それほど、大変ではなかった」「研究授業や参観授業も多く、周辺の学校より進度が遅いこともあった」「（でも）総合学習『輝きの時間』はたのしかった」と語る。多くの附中生が同じような生活スタイルだったから、E館の徹底した能力別授業やテスト漬けを疑問に思うことはなかった。むしろ、それぐらいまでしないと「やっぱり成績が上がらないという方針らしくて…」「まあ、そうさせられない限り、多分（勉強を）しない年齢なので…。させられたからしたんだとは思うんですけど」「…宗教的な塾ですね（うふふ）」とも。筆者が大学で接してきた大学生も、これが「日本の中高生の生活のスタンダードである」と考えていた。

高校教員としての体験は筑駒の19年間だけだが、1960年代の自身の中学・高校生活を振り返ってもBさんが語る中高生活とは相当の落差がある。筑駒の生徒であれば、0時間目や7時間目の授業は拒否するであろうし、夏期・冬期の補講など考えにくい。

佐賀では、生徒はもちろんのこと、親も教員も同じような学習経験を重ねて「いまの生活」が実現しているから、さほど疑問に感じることはないであろう。校長として生徒や親と話す機会も多かったのだが、「何かオカシイ」「これでいいのか」という違和感や疑問を抱く生徒・親も中にはいるのだが、「異議申し立て」をするまでには至らない。人と人との「結いの濃さ（地縁や血縁）」「狭い生活基盤」がマイナスに働く。

附属小時代を振り返ってのBさんの語りを紹介する。

142 B：まあ、4年ぐらいから、また塾に行き始めて。まあ、みんなの学力の差とか、結構出てくるじゃないですか。学校のテストとかも、結構始まるのでがっつり勉強してました。地元で友達がいらない分、やっぱりその一附属の子と遊んで帰るとか、兄と帰るとか。そういう生活ばかりしてました。

143 *：何かあの、自分としては地元で友達がいないってことを、何か特別に感じたことはない？（*は、質問者である井上）

144 B：それが普通だと思って生きているんで、あんまり思わなかったんですけど、今になると近所の子に知り合いがないんですよ。ま、家の前の子ぐらいしか分からないんで。何かさみしい感じはしますけど、別にいいかなって感じですけどね。

145 *：ああ、そうか。あの、あなたからいただいたそのプロフィールを見てさ、「塾、塾、塾」「勉強≒受験勉強」っていうのがよく出てくるなっていうのがね。それは、ご両親の方針だったわけですね？

附属小では、5年生から年に数回の「実力テストの実施」「中学受験（難）問題集『ウインパス』の宿題」が課される。相当以前からのことだ。「附属中で困らぬように」「家庭学習の習慣を付ける」等の説明が親たちにはされてきたそうだが、説得力に乏しい。原則的に「連絡入学制度」がとられてきているから、基礎・基本の習得がされていれば附属中には進学できるのだが、「受験の文化」「勉強≒受験勉強」が附属小学校の教員や保護者にも浸透していることが見てとれる。教員自身がそうした経験を重ねてきているのである。

私自身は、20年近い附属教員の経験を通して「附属中高が、塾と同じ方針で授業や学校活動を展開することを子どもも親も望んではいないであろう」と信じて疑ってはこなかったのだが…。

佐賀西高に進んでから、Bさんはテニス部のマネージャーをつとめ、生徒会の執行部に入っていた。好きな英語を中心に勉強をしていた。ちなみに、西高のある先生は、「彼女はこんなに頑張ってきたじゃないですか」とBさんを高く評価していた。高校に入ってから、塾をそれまで通い続けたE館からZ研に変え、「西高コース（クラス）」で1年生から大学受験対策に明け暮れた。西高でも塾でも好きな英語は一生懸命勉強したが、数学や物理は苦手で適当にやっていた。大学でやりたいことがはっきりしていたから私学文系のクラスに入り、比較的自由にやらせてもらえた。九大志望クラスに入っていたら、もっと大変で窮屈な高校生活になっていたと思うと繰り返し語る。

大学の進路選択に関するトランスクリプト（対話録）の一部を紹介する。

298 *：あらためてさ、いま大学2年生なわけでしょう。その一、あなたの選択は間違っていなかった？

299 B：間違っではないですね。周りから「九大に行け」といわれて行ったって
いう達成感よりも、自分で選んだので「やんなきゃいけない」という使命感
とか、親も最初は反対だったので、東京に行くことも、私大に行く
ことも。喜んで出したわけではないので、それを押し切って私は来てるから、
「やんなきゃいけない」というのが私の責任、義務とか変な意味でのプレッシャーがある。

300 *：僕は佐賀に来て7年になるんだけど。佐賀の採用試験ってのは、とって
も厳しいですよ、枠が少ないから。だから、東京とか大阪だとかね、大
都市圏ではまだ教員の採用枠が大きいから、何年かそっちに行っさ、ち
よっとその、九州とは違う地域の世界や文化に触れて、佐賀に戻ってくれ
ばって言うてるんだけど、佐賀を出て行きたがらない。

301 B：うーん。

302 *：佐賀の中で自足しているんじゃないかね、一度外に出てさ、そこでもま
れて佐賀に戻ってくるとね、あらためて佐賀の良さもね、足りないところ
も見えるんだよね。あの一、九州の子は…。

303 B：「まあ、九州でいい」って思いますね。

304 *：うん。関門海峡を越えたくないんだよね、なんでですか。

305 B：やっぱり九大っていうのが、大きなのがあるので。九州でいったら、九
大が結構ステータスになるじゃないですか。「もうそれでいい」って思っ
ちゃうんですよ。周りも、親とかも、親世代がそうなんで。九大に行っ
たら、なんか、附小、附中、西高、九大が王道って言われるような感じで。
それに行けば間違いはないだろうっていうのがあるのかもしれないですけ
ど。

306 *：確かにね。あの一、県庁に勤めてる人も。

307 B：九大が多いですよ。見た目だけで行くっていうのもあるんで。まあ、
ずっとこう決められていたとか、附中、西高でっていうのがあったん
ですけど、あたしがすごい、C大に行くとかすごい言い張ったんで、親もび
っくりしてて。

彼女も、担任からは九大や東京外語大の受験を強く勧められたと言う。高校の
「詰め込み」授業については、塾でも詰め込まれてきたので「受験勉強とは、こ
ういふものだ」という感じで、それほど疑問に思わず過ごしてきた。しかし、C大

にきて、東京出身の同級生が0時間目や7時間目を経験してきていないことを知った。私は先生達にとっては「やっかいで、扱いにくい『附属ジュニア』（*佐賀西高では、附属出身者を「附属ジュニア」と呼ぶ。佐賀西の先生はご存知なかったが…。）だったかもしれない」と、語る。

こうした受験を軸とした高校（進学校）文化は、佐賀西高だけでなく佐賀県内の公私立の進学校では普通に見受けられることがらである。トランスクリプトから、家族が持つ受験観、中高時代の同級生の勉強観が、「自分の生き方を考える、探る」というよりは「附属、西高を経て九州大学に進学すること、そうすることでおのずから道は開ける」と考えられていたことがうかがい知れる。

もう一つ、附属中から西高に進学し福岡の予備校で1年間の浪人生活を経て、現在都内の公立大学工学部で学ぶX君の「西高の数学授業」についての語り・対話を紹介する。インタビューは学部で数学を講じる若手のD先生（東京都出身）である。X君は、中学校まで数学が得意であったと言う。

716 X：早いのです。教科書の進め方がもうべらぼうに早くて、「うわあっ」とな
って。

717 *：よくついでいきましたね。

718 X：そうですね。ぼくもびっくりしましたけれども、でもほとんどが置いて
いかれたり、やはり塾に行ったりして。中略

722 X：最初は塾が早かったのですけれども、途中で追い越されて。また、塾は
コンスタントにやっていくので、そこは過ぎていくのですけれども、塾の
方が先取りしていくのですけれども、それにしてもやはり早かったです、
西高が無駄に早かったです。

723 *：無駄に早かった？無駄に早かったということは、そのようなスピードに
は抵抗がありました？

724 X：ある子が多かったです。今はもっとすごいらしくて、スピードが。その
当時でもヒーヒー言っていたのに、今はもっと早くしていると聞いて、び
っくりしたのですけれども。中略

743 *：Xさんはついていったのですか？そのペースに？

744 X：なんとかかつかつていったのですけれども、やはりⅢC、そうですね、
なんとかついていきましたね。はい、いきました。

「無駄に早い」「このスピードに抵抗がある生徒が多かった」という発言を見れば、インフォーマント自身も授業の進行に不満があったことが見て取れる。口ごもりながらも自分については行けたと発言するのは、数学に対して得意意識をもっていたという自負もあるのであろう。具体的な進行を聞いてみた。

740 X：3年生の1学期で、もうⅢCを終わらせるのです。ⅢCを終わらせて、理系の場合は、それから後は演習というような感じ。

741 *：演習で何をやるのですか？

742 X：いわゆる問題集をやるような感じですよ。学校が買った問題集をやるというような感じ。

確かに非常に早い。このペースでついていける方が素晴らしい？というくらいの進行である。ちなみに筆者の高校では、数学Ⅲ（当時は別な呼び方をしていた）が終わったのは高校3年生の3学期の最後であり、担当教員は「入試で使う人は自分で教科書を終わらせるように」と指導していた。筆者（D先生）は、センター試験の前あたりでようやく高校数学の範囲を自分で仕上げた。筆者の高校時代の学力から見て、仮に西高のペースで進められたら必ず消化不良を起こしていたと確信できる。

さらに数学を学ぶ上で、極めて致命的な姿勢を垣間見ることになる。

754 X：（前略）僕は粘れない正確だったので、その当時。難しい問題だと、結構苦労はしたのですけれども、でも数学に関しては、すごく愉しかったです。

755 *：粘れないということは、何か問題にぶつかったときに、本当に時間をかけて考えたり、そのようなことをしなかったということですか？

756 X：そうです。あまりそれができなかったタイプで、すぐに参考書を開いたり。

757 *：なるほど、調べるということですね？

758 X：そうです。そちらに手が行ってしまっ。

確かに上述のペースで進められたら授業内容を回すのに手一杯で、「立ち止まって考える」時間など持てないであろう。学生たちにも同じ姿勢を多く見るとD先生は語る。

X君の語りから、不満や抵抗を覚えながらも自分が高校の期待通りに出来なかったことを、「自己責任」「努力不足」として受け止める文化・風土が根付いていることが分かる。

5. まとめにかえて

本研究に関わったことを通して、佐賀の「受験」「部活動」を軸とする学校文化についてあらためて確認できた。同時に、学校教育で必要なことは「それぞれの教科の授業で学ぶ知識やスキルと児童・生徒のアイデンティティ形成のつながりをつける」「佐賀や日本という地域が抱える課題を、生徒と教師と一緒に教室で語り合い、考えること」「受験が終わった途端に剥落する要素的な知識やスキルでなく、中内が語る『すて去られることなく、人間とともにある能力』の形成、獲得」であることが確認できた。

教師が子どもたちや親と共有すべきことは、「『受験』『部活動』に情熱を注ぐこと」でなく、日本や地域が抱える課題にどれだけ向き合ってきたのか、子どもの挑戦・貢献の場所探しに教師や親としていかなるサポートができるのかの問い直し」である。

先行きや解決の方向性が見えない問題を、教科や道徳、総合学習の時間、HR（ホームルーム）、児童会・生徒会活動、部活動（九州では、吹奏楽や合唱を除くと文化系のクラブが総じて低調である。）、大学であればゼミや講義の中でどのように組織し、展開できるのかが、今まさに問われているのだと思う。親たちにもこうした問題を語り、議論し、学校・教育の課題を共有し合う必要がある。受験につながる「教科学習」でなく、「学校行事」「特別活動」「総合学習」「生徒会・委員会活動」などを通して取り組むべき一人ひとりの「アイデンティティ（生きる力）形成」が問題なのである。これは、教員養成学部で教える大学教員にとっての喫緊の課題であり、筆者にとっても「『地域に根ざす』ことの意味、「アイデンティティ形成と算数・数学教育のつながり」をこれからも考え続けたいと決意させる研究になった。

筆者が担当する数学教育について言うと、小学校の高学年あたりから、中学校・高校と学年が上がるにつれて「授業」に活気がなくなる。「考える」「議論する」場面が減少し、一方通行の「伝達」授業ばかりでつまらないのである。知識やスキルを蓄えていくのだから、多様な意見や疑問が出ておもしろい議論が展開されてもいいはずであるのに、現実とは逆である。分からないときは「公式を暗記し、それをどう適用して正解を求めるか」という学習（受験勉強）観が強くなる。教員もそれが「数学では、あたりまえ」と考えている。

数学を学ぶことのたのしさ、数学のおもしろさ、奥深さ、数学的な考え方の必

要性を生徒にどう伝え、共有していくのか、これらを生徒一人ひとりの「生きる力」(アイデンティティー)形成とどうつなぎあわせていくのかという課題は、42年間、中高大の教員をつとめてきた筆者の永遠のテーマだが、この道は果てしなく遠い。

長い年月をかけて築かれた「教育風土」「学校文化」に覆われた「地域の教育」が抱える問題の根や幹は、風や土壌や水の中に奥深くしみこんでおり、その解決は決して一筋縄ではいかない。

**「学びのヒストリー」研究は、5年前から取り組まれた附属小中の連携研究、3年前からの西高との交流から生まれた。学部と附属の連携協力が求められ、これまでも散発的に、学部教員との共同研究が進められてきた。しかし、「組織的な取り組み」ではなかった。附属生の半数が進学する県立佐賀西高等学校との交流が始まり、研究会の相互参加・授業参観・協議会・検討会等を行ってきた。

引用・参考文献

- (1) 中内敏夫『学力とは何か』1983 岩波新書 pp.23-24
- (2) 藤村宣之「学習観の形成と知識の獲得・利用」三宮真智子編『メタ認知』2008 北大路書房 pp.49-54
- (3) 井上正允『「地域の教育」をどう創る—佐賀県検証改善委員会の活動を振り返りながら—』2008『九州教育学会研究紀要』第36巻 pp.17-25
井上正允『「受験の文化」に浸食される『学校の文化』—『進学校の明暗』を考える一つの視点—』『高校生活指導』2005年秋季号 166号 青木書店 pp.58-63
井上正允「甲子園と九大進学—佐賀県の中学・高校教育について—」『教育』2007年12月号 国土社 pp.114-116
- (4) 佐賀大学中学・高校連携教育モデル開発研究会『ナラティブ・アプローチによる附属学校卒業生の「学びのヒストリー」に関する調査研究』（研究代表者：佐長健司、2012年3月）平成23年度日本教育大学協会研究助成研究成果報告書
- (5) 同上佐長健司「学びのヒストリーとは何か」pp.5-11